

立 見 辰 雄 先 生

島 崎 英 彦 (地質)

地質学教室の立見辰雄先生はお名前から判るように大正5年辰年のお生れで、本年2月に満60才を迎えられこの春で定年退職される。先生は地質学教室で鉱床学を専攻され、昭和14年に御卒業の後、大学院を経て昭和16年理学部助手となられた。その後資源科学研究所、東大教養学部へ籍をおかれたが、昭和32年より理学部へ戻られ、以来今日まで約20年の長きにわたって鉱床学の御研究と学生の指導に力をそゝいでこられた。

先生の御研究は一口に鉱床学といっても多岐にわたっており、とても限られた紙面では御紹介しきれないが、戦後しばらくまでの間は満州や本邦の銀・モリブデン・アンチモンなどの鉱床について沢山のすぐれた記載的研究を發表された。その後塊状硫

化物鉱床とよばれる型の鉱床に興味をむけられ、宮崎県の槇峯鉱山の鉱床について詳細な御研究を学位論文として發表された。つづいて秋田地方などに多くみられる黒鉱鉱床にも手を広げられ、鉱床研究室の前の教授であられた渡辺武男先生と共に、黒鉱鉱床の成因について従来の説を破って新たに海底噴気堆積説をうちたてられた。これによれば黒鉱鉱床は最も新しい時代の塊状硫化物鉱床の一つのタイプであり、変形や変成をうける以前のオリジナルな姿をとどめているものである。この説は1970年に立見先生が編者となって出版された *Volcanism and Ore Genesis* によって広く世界に受け入れられ、世界中の鉱床学者の間に黒鉱ブームをまきおこした。黒鉱見学のために日本を訪れる鉱床学者があとをたゞず、

今では鉱山会社はその応接に悲鳴をあげるほどになっている。

立見先生の普段の御研究や学生の指導ぶりを拜見して一番強く印象に残ることは、議論にせよ測定にせよ非常に厳密さを要求されることである。議論であればいかなるデータに基いてどの範囲にまで言及しているのかということ、また測定であれば精度・確度の問題をいつも口にされる。学生は毎年かわっていくがいつも側にいる我々は本当に耳にタコができるほどである。ある測定器機を購入してからプランクテストを終えるまで1年も2年もかかったりする。“石橋を叩いて叩き壊す”と学生が噂するゆえんである。

もう一つの印象的な側面は、一見これとは正反対に感じられるのだが、新しい手段や考え方に対する積極的な姿勢とでもいうものである。かつて黄鉄鉱地質温度計なるものがカナダの一学者から提唱された時に、いち早く日本に紹介し御自身でも取組まれた。これは結局温度計としては成功しなかったがこれなどが良い例であろう。その他、流体色有物や硫黄同位体の御研究などにもこの姿勢があらわれている。硫黄同位体では従来天然の硫化物間には測定できるほどの同位体分別は起っていないとされていたものを、先生一流の精密な実験により分別があることを実証された。1965年のこの画期的な論文により分別の温度効果の研究が盛んに行われるようになり、現在では鉱床学の研究に欠くことのできない温度計が確立されるに至っている。

立見先生といえはすぐに思い出されることは南極

越冬であろう。先生は第一次越冬隊の隊員で、第四が確立されるに至っている。

立見先生といえはすぐに思い出されることは南極越冬であろう。先生は第一次越冬隊の隊員で、第四次の探険隊の隊長もつとめられた。第一次越冬では隊長の西堀氏の言を借りれば（南極越冬記—岩波新書）、キーマンとしてこの個性的な隊長と他の隊員との間のクッションの役割を果たされたようであり、この間の事情は上記越冬記に詳しく、先生のお人柄がしのばれて興味深いものがある。越冬記では大変な悪者に書かれている麻雀であるが、たしかに先生はお好きなようで毎年正月には研究室の者が立見杯争奪戦と称してお宅へお邪魔する。この仲間内での先生の腕のほどは中の上ぐらいであろうか。

南極に関係された数年間は鉱床学の論文よりは専ら南極の地質その他の論文を書いておられ、この期間南極のお仕事にいかにか打込んでおられたかが判る。先生は御自分のことについては殆ど話されることがないのでこれは全くの想像であるが、先生の胸のうちにはあの南極の大自然への想いが今でも強く脈打っているのではないだろうか。

学術会議地質研連の委員長を長くつとめられ、鉱山地質学会会長、国際地質対比計画日本委員会委員長などを兼ねられお忙しい毎日であるが、まだまだ心身ともにお若い先生である。今後共厳しい御批判と新鮮な地質観で後進の御指導をいただけるなら本当に幸いである。先生の御健康となお一層の御活躍をお祈りしてやまない。